○　○　○　○　○

地域医会だより

県央皮膚科医の会

平成29年は県央皮膚科医の会の講演会を１回と、県央地域の中の大和市皮膚科医会の講演会を２回開催いたしました。

●第11回県央皮膚科医の会

日　時：平成29年９月14日（木）

会　場：オークラフロンティアホテル海老名

テーマ：「帯状疱疹診療の新時代 ～アメナリーフへの期待～」

講　師：愛知医科大学医学部皮膚科学講座教授　渡辺大輔先生

●第11回大和市皮膚科医会

日　時：平成29年７月１日（土）

会　場：小田急ホテルセンチュリー相模大野

テーマ：「爪真菌症 ―up to date―」

講　師：東京医科大学病院皮膚科准教授　原田和俊先生

●第12回大和市皮膚科医会

日　時：平成29年10月28日（土）

会　場：小田急ホテルセンチュリー相模大野

テーマ：「円形脱毛症に対する治療法とその効果について」

講　師：独立行政法人 労働者健康安全機構 横浜労災病院皮膚科部長　齊藤典充先生

（文責：矢口　厚）

○　○　○　○　○

地域医会だより

横浜市皮膚科医会

【平成29年度の事業報告】

１．例会について

・第146回例会

日　　時：平成29年４月１日（土）

会　　場：関内新井ホール

共　　催：マルホ株式会社
教育講演：「ざ瘡治療の新しい戦略 ―ざ瘡治療薬のポジショニング」
講　　師：明和病院皮膚科　黒川一郎先生
特別講演：「増えている梅毒」
講　　師：まりこの皮フ科　本田まりこ先生
病院紹介：けいゆう病院
参 加 者：81名

・第147回例会
日　　時：平成29年７月２日（日）神奈川県皮膚科医会と合同
内容は省略

・第148回例会
日　　時：平成29年10月19日（木）
会　　場：関内新井ホール
共　　催：株式会社ポーラ ファルマ
教育講演：「爪のみかたと診療の進め方 ―爪白癬外用治療薬のポジショニング―」
講　　師：埼玉医科大学総合医療センター皮膚科教授　福田知雄先生
特別講演：「メラノーマ診療 up-to date」
講　　師：札幌医科大学医学部皮膚科教授　宇原　久先生
病院紹介：横浜市立みなと赤十字病院
参 加 者：77名

２．第９回市民公開講座について

日　　時：平成30年３月18日（日）
会　　場：横浜情報文化センター 情文ホール
共　　催：株式会社ポーラ ファルマ
テ ー マ：「あなたの爪は大丈夫？」
講 演 １：「爪ってどんなもの？ ～そのつくりと役割～」
講　　師：横浜労災病院皮膚科部長　齊藤典充先生
講 演 ２：「爪水虫ってどんな病気？ ～診断から治療まで～」
講　　師：済生会横浜市東部病院皮膚科部長　畑　康樹先生
講 演 ３：「足美人爪美人になるには ～足と爪のケアの極意をお教えします～」
講　　師：野村皮膚科医院　野村有子先生
医療相談：横浜市皮膚科医会役員
参 加 者：130名

３．横浜市医師会関連事業について

・横浜市医師会第６回市民公開講座
日　時：平成30年３月８日（木）
会　場：横浜市健康福祉総合センター４階ホール
テーマ：「水虫の真実」～誤解をなくして正しく治療～
講　師：杉田皮フ科クリニック　杉田泰之先生

・第25回横浜臨床医学会学術集談会
日　時：平成29年12月２日（土）

会　場：崎陽軒本店６階
テーマ：「これって疥癬？ ～多彩な臨床とその対策」
講　師：いずみ野皮ふ科　増田智栄子先生

・「みんなの健康」７・８月号掲載
テーマ：「虫刺され」
担　当：綱島診療所そう皮フ科　宋　寅傑先生

・ラジオ日本「みんなの健康ラジオ」
①日　時：平成29年８月24、31日放送
テーマ：「水虫の話」
担　当：高橋皮フ科クリニック　高橋泰英
②日　時：平成30年３月22日、29日放送
テーマ：「帯状疱疹の疫学と症状」「帯状疱疹の治療と予防」
担　当：浅井皮膚科クリニック　浅井俊弥先生

４．横浜市皮膚科医会学術講演会

①日　時：平成29年10月12日（木）
会　場：ヨコハマグランドインターコンチネンタルホテル
共　催：セルジーン株式会社
オープニングレクチャー：いずみ野皮ふ科　増田智栄子先生
講演１：「クリニックにおけるアプレミラストの導入例 医療連携への期待」
講　師：横浜西口菅原皮膚科　三上万理子先生
講演２：「乾癬治療を再考する ―アプレミラストの登場で何が変わるのか―」
講　師：横浜市立大学皮膚科学　山口由衣先生
パネルディスカッション：横浜市立大学皮膚科学　相原道子先生、JCHO横浜中央病院皮膚科　鎌田英明先生、横浜市立大学附属市民総合医療センター皮膚科　蒲原　毅先生、並木小磯診療所　内田敬久先生、横浜西口菅原皮膚科　三上万理子先生、横浜市立大学皮膚科学　山口由衣先生
参加者：87名
②日　時：平成29年11月30日（木）
会　場：横浜ベイ東急
共　催：マルホ株式会社
講　演：「乾癬の外用治療と生活指導」
講　師：東海大学皮膚科学教授　馬渕智生先生
参加者：37名

５．表彰

・平成30年３月20日　毛利　忍先生
横浜市医師会学術功労者表彰

（文責：高橋泰英）

○　○　○　○　○

地域医会だより

鎌倉市皮膚科医会

今年度の活動はありません。

（文責：原　尚道）

○　○　○　○　○

地域医会だより

藤沢市皮膚科医会

日　時：平成29年３月15日（水）19時30分～
会　場：湘南クリスタルホテル５階「ボンヌ・シャンス」
講　師：帝京大学医学部附属溝口病院皮膚科教授　清　佳浩先生
テーマ：「白癬の治療戦略」

日　時：平成29年７月19日（水）19時30分～
会　場：湘南クリスタルホテル５階「ボンヌ・シャンス」
講　師：愛知医科大学医学部皮膚科学講座教授　渡邉大輔先生
テーマ：帯状疱疹の治療・予防の最新情報

日　時：平成29年11月22日（水）18時50分～
会　場：藤沢市医師会館
講　師：横浜市立大学大学院医学研究科環境免疫病態皮膚科学講師　山口由衣先生
テーマ：「皮膚と関節から考えるこれからの乾癬診療」～最良のアウトカムをもたらすために～

日　時：平成30年３月28日（水）19時30分～
会　場：湘南クリスタルホテル５階「ボンヌ・シャンス」
講　師：名古屋大学大学院医学系研究科皮膚病態学教授　秋山真志先生
テーマ：「皮膚バリア機能とアレルギー性疾患の関係性：最新の話題」

（文責：小林誠一郎）

○ ○ ○ ○ ○

地域医会だより

川崎市皮膚科医会

●川崎市皮膚科医会第15回定時総会／第23回川崎市皮膚科医会例会学術講演会

平成29年10月４日（水）にホテル精養軒（武蔵小杉）にて、第15回川崎市皮膚科医会定時総会・第23回川崎市皮膚科医会例会学術講演会を開催しました。

総会は望月明子会長の挨拶の後、石橋正史先生（日本鋼管病院皮膚科部長）が議長として選出され、第１号議案「平成28年度会務報告に関する件」以降、第５号議案「役員人事に関する件」まで円滑に承認され無事終了しました。

講演会は下記の要領で開催しました。

第23回川崎市皮膚科医会例会（学術講演会）

座　長：帝京大学医学部附属溝口病院皮膚科常任客員教授　清　佳浩先生

講　師：昭和大学医学部附属藤が丘病院皮膚科教授　中田土起丈先生

テーマ：「接触皮膚炎あれこれ」

接触皮膚炎の原因物質や診断など、とてもわかり易くご講演していただきました。

●川崎市市民公開講座

日　　時：平成29年11月５日（日）10時30分～ 12時30分

会　　場：川崎日航ホテル

来場者数：47名

相談者数：10名

行事内容：講演会、皮膚の健康相談コーナー（個別）を開催

講　　演：「皮フのカビ・爪水虫」

講　　師：帝京大学医学部附属溝口病院皮膚科常任客員教授　清　佳浩先生

主　　催：川崎市皮膚科医会

共　　催：川崎市医師会、マルホ株式会社

後　　援：川崎市

（文責：渡部秀憲）

○ ○ ○ ○ ○

地域医会だより

三浦半島皮膚科懇話会
横須賀市医師会皮膚科部会

【第48回三浦半島皮膚科懇話会・第31回横須賀市医師会皮膚科部会学術講演会】

日　　時：平成29年２月４日（土）17時45分～
会　　場：メルキュールホテル横須賀４階「ヴェルサイユ」
座　　長：金丸皮膚科院長　金丸哲山先生
製品紹介：尋常性ざ瘡治療剤「エピデュオゲル」
特別講演：「エビデンスに基づく尋常性ざ瘡治療薬の使いわけ」
講　　師：谷岡皮フ科クリニック院長　谷岡未樹先生

「エビデンスに基づく尋常性ざ瘡治療薬の使いわけ」

谷岡皮フ科クリニック院長　谷岡未樹先生

ざ瘡治療はこの10年で大きく変貌を遂げた。これまでのざ瘡治療は炎症性皮疹（赤ニキビ）に対する抗菌剤による対症療法が治療の主流をなしていた。ところが、アダパレンゲルそして過酸化ベンゾイル製剤の登場により面皰（黒ニキビ・白ニキビ）が治療ターゲットとして認識されるとともに、抗菌剤耐性菌に配慮した治療もクローズアップされてきた。

ただ、2015年以降、治療薬が３種類増えたこともあり、実地医家のなかには「どの薬剤を、どのような症例に用いるのがよいのか」お悩みで、かつ、うれしい悲鳴を上げておられる先生もおられるかもしれない。

これらの事情を反映して2016年に本邦のざ瘡治療ガイドラインが改訂された。改訂されたガイドラインのポイントを述べる。

まず、新ガイドラインでは、抗菌剤耐性菌に配慮した治療を推奨している。これはひとえに、薬剤耐性のニキビ桿菌の割合が本邦においても増加傾向にあるからである。そもそも、過酸化ベンゾイルは将来懸念される薬剤耐性菌の増加を未然に防ぐために日本皮膚科学会から厚生労働省に申請され、その社会的背景から異例の早さで承認された経緯もある。今後のざ瘡治療は、抗菌剤の使用期間を急性期の限られた期間に限定し、抗菌剤を適切に使用していくことが求められている。

次に、新ガイドラインにおいて治療アルゴリズムは大きく変化した。これまでのガイドラインではざ瘡の皮膚症状ごとに治療薬を評価していたが、新ガイドラインでは急性炎症期と維持療法期に分けて記載されている。つまり、病期によって治療薬を選択できる時代がきたといえる。治療開始から３ヶ月までを急性炎症期、４ヶ月以降から12ヶ月目までを維持療法期と定義している。これは、海外のガイドラインと比較しても新規性のある治療アルゴリズムである。これが可能となったのは、本邦において12ヶ月間薬剤を使用継続する臨床試験がアダパレンと過酸化ベンゾイルについて実施されていることが背景にある。

それでは、各治療薬をどのように使い分ければ良いのであろうか？　ガイドラインで推奨度Aを獲得している薬剤は、どの薬剤も医学的にはざ瘡に対して高い医学的エビデンスを有している。これらの薬剤の使い分けに確固とした根拠はないが、ざ瘡が多段階的に生じる疾患であることから、併用療法や配合剤がコンプライアンスの観点を含めて推奨される。

【横須賀・三浦地区皮膚疾患学術講演会】

日　　時：平成29年10月28日（土）17時45分～
会　　場：セントラルホテル横須賀５階「ルビー」
座　　長：金丸皮膚科院長　金丸哲山先生
製品紹介：抗ヘルペスウイルス剤「アメナリーフ錠」
特別講演：「帯状疱疹について ～最近の話題～」
講　　師：まりこの皮フ科院長　本田まりこ先生

帯状疱疹について ～最近の話題～

まりこの皮フ科院長　本田まりこ先生

帯状疱疹は水痘・帯状疱疹ウイルスの初感染後、感覚神経節に潜伏していたウイルスが再活性化して、体の片側の神経支配領域の皮膚や粘膜に帯状に紅斑、水疱、膿疱、痂皮を形成する疾患で、50歳以上の高齢者に多い。 80歳までに３人に１人は罹患すると云われている。再活性化の機序は明らかにされていないが、水痘・帯状疱疹ウイルス特異的な免疫記憶細胞の減少が大きく関わっており、水痘患児の接触が免疫の維持に重要とされている。しかし、平成26年10月より水痘ワクチンが定期接種化され、水痘が激減した。従って、帯状疱疹患者の増加が予想されていたが、現に我々の調査では今年の患者数が平成26年と比べ３倍に増加している。

帯状疱疹治療に従来の核酸類似薬であるアシクロビル、バラシクロビル、ファムシクロビル、ビダラビン以外に新規薬剤であるアメナメビルが加わった。我が国で開発されたアメナメビルは、ヘリカーゼープライマーゼ阻害薬であり、核酸類似薬ではない。従来の薬剤と異なり耐性株にも有効で、しかも１日１回内服で、腎機能による調節も必要がない。

【横須賀・三浦地区皮膚科講演会】

日　　時：平成29年11月11日（土）17時45分～
会　　場：メルキュールホテル横須賀４階「ヴェルサイユ」
製品紹介：アレルギー性疾患治療剤　ビラノア®錠について
座　　長：金丸皮膚科院長　金丸哲山先生
特別講演：「アトピー性皮膚炎の病態と治療 ―新規抗ヒスタミン薬を含めて―」
講　　師：日本医科大学大学院医学研究科皮膚粘膜病態学分野教授　佐伯秀久先生
共　　催：横須賀市医師会・三浦市医師会、大鵬薬品工業株式会社

アトピー性皮膚炎の病態と治療 ―新規抗ヒスタミン薬を含めて―

日本医科大学大学院医学研究科皮膚粘膜病態学分野教授　佐伯秀久先生

アトピー性皮膚炎（AD）の病態を考える際、免疫アレルギー的機序と異常な皮膚機能の２つの側面から考えると分かりやすい。また、両側面を支持する遺伝学的解析データも得られつつある。免疫アレルギー的には、基本的にTh2優位の疾患と捉えられる。Th2ケモカインであるTARC／CCL17の血清中の値が、ADの短期的な病勢を反映することが示された。異常な皮膚機能（バリア障害）では、皮膚の角化に関与するフィラグリンの発現低下が関与しており、フィラグリンをコードする遺伝子変異も国内外で示された。また、Th2細胞が産生するIL-31の受容体は痒みを中枢に伝えるC線維に発現しており、IL-31は痒みに関して免疫系と神経系を橋渡しするサイトカインとして重要である。

ADの治療の基本は、薬物療法、スキンケア（バリア障害の補正）、悪化因子の検索と対策の３つである。薬

物療法では抗炎症外用薬であるステロイド外用薬とタクロリムス軟膏が最も重要である。抗炎症外用薬で皮疹を略治（寛解導入）した後、抗炎症外用薬の外用を定期的（週に２回など）に続けるプロアクティブ療法（寛解維持療法）は、皮疹の再発予防に有効である。また、プロアクティブ療法を行っている間も保湿外用薬によるスキンケアを毎日続けることが勧められる。

ADの痒みに対する抗ヒスタミン薬の内服は、抗炎症外用薬の補助療法として勧められる。抗ヒスタミン薬では、第一世代抗ヒスタミン薬と治療効果に差がなく、眠気や作業効率障害などの副作用が少ない第二世代の抗ヒスタミン薬が第一選択と言える。なかでも、2016年に新規化合物としては14年振りに発売されたビラスチンは、抗コリン作用のないカルボキシル基を有する第二世代抗ヒスタミン薬であり、脳内ヒスタミンH1受容体の占拠率がほぼ０であることから、完全なる非鎮静性の薬剤と位置付けられている。ビラスチンは速効性があり、効果が持続することから、１日１回投与でよい利便性の高い薬剤と言える。

ADの重症・難治例に対しては、シクロスポリン内服やNB-UVBなどの紫外線療法が短期的な寛解導入療法として検討できる。今後臨床応用される可能性のある新しい治療として、Th2サイトカインであるIL-4とIL-13の両方を抑えるIL-4受容体抗体や、IL-31受容体抗体、IL-13抗体などの注射薬（抗体医薬）がある。また、シグナル伝達系であるJAKを抑えるJAK阻害薬の内服・外用の治験や、PDE4阻害外用薬の治験も現在進行中である。

【第49回三浦半島皮膚科懇話会・第32回横須賀市医師会皮膚科部会学術講演会】

日　　時：平成30年２月10日（土）17時45分～
会　　場：メルキュールホテル横須賀４階「ヴェルサイユ」
座　　長：金丸皮膚科院長　金丸哲山先生
製品紹介：皮膚保湿剤「ヒルドイドクリーム」
特別講演：「アトピー性皮膚炎の治療戦略」
講　　師：東京大学大学院医学系研究科皮膚科学教授　佐藤伸一先生

アトピー性皮膚炎の治療戦略　　東京大学大学院医学系研究科皮膚科学教授　佐藤伸一先生

アトピー性皮膚炎では、フィラグリン遺伝子変異による発現低下、あるいはTh2優位の炎症によるフィラグリンの蛋白レベルでの発現低下によって、皮膚バリア機能が低下することが、その原因と考えられている。皮膚バリア機能低下により、外来アレルゲンが皮膚に侵入し、経皮感作を起こすことによって、食物アレルギーや喘息を新たに発症するという、いわゆるアレルギーマーチが生じることが想定されている。そのため、アトピー性皮膚炎では、抗炎症治療を行い、皮膚バリア機能を正常に維持することによって、アレルギーマーチへの進展が阻止できる可能性が考えられている。しかし、炎症が再燃したら、その都度抗炎症治療を行う従来のリアクティブ療法では、炎症の再燃によってフィラグリンの発現低下が生じるため、バリア機能を正常に維持できない。

これまでのアトピー性皮膚炎の治療の考え方はリアクティブ治療であったが、新しい考え方はプロアクティブ療法を取り入れた、バリアを正常に維持し、炎症を起こさせない治療である。一見、正常に見える皮膚でも軽い炎症、バリア異常が残っている（サブクリニカルな炎症が存在する）ため、プロアクティブ療法に先だって、寛解導入をしっかりと行う必要がある。寛解導入が十分行われた後に、週に１～３回外用するプロアクティブ療法を行うことにより、再燃が抑制され、皮膚バリア機能を正常に維持することが可能となる。プロアクティブ療法を行うことによって、アトピー性皮膚炎の重症化やアレルギーマーチを阻止することが可能となり、今後アトピー性皮膚炎の重要な治療法となるものと考えられた。

（文責：金丸哲山）

○ ○ ○ ○ ○

地域医会だより

小田原皮膚科医会

平成29年度は学術講演会を下記の通り開催いたしました。

【第630回小田原医師会・足柄上医師会合同学術講演会】

日　時：平成29年９月21日（木）

会　場：おだわら総合医療福祉会館

テーマ：「帯状疱疹の治療、予防 ～妊婦は？　小児は？　その疑問にお答えします～」

講　師：東海大学医学部専門診療学系皮膚科学教授　馬渕智生先生

座　長：クローバー皮膚科クリニック　相川洋介先生

共　催：マルホ株式会社

参加人数：36名

帯状疱疹の感染経路や合併症、治療について、細かくわかりやすくお話しいただきました。他科の先生方に大好評でした。

今年度は９月25日（火）に埼玉医科大学皮膚科教授の土田哲也先生をお招きし、皮膚のアレルギーに関する講演をしていただく予定となっております。

（文責：相川洋介）

○ ○ ○ ○ ○

地域医会だより

茅ヶ崎医師会皮膚科部会

【症例検討会】

日　時：平成29年６月６日（火）

会　場：茅ヶ崎市立病院皮膚科外来

講　師：茅ヶ崎市立病院皮膚科部長　池澤優子先生

【講演会】

日　時：平成29年９月15日（金）

会　場：茅ヶ崎ラスカ６階ホール

テーマ：「帯状疱疹の治療、予防 ～妊婦は？　小児は？　その疑問にお答えします～」

講　師：東海大学医学部専門診療学系皮膚科学教授　馬渕智生先生

（文責：小野秀貴）

○ ○ ○ ○ ○

地域医会だより

平塚市医師会皮膚科部会

【第74回例会】

出席者　：34名

日　　時：平成29年５月24日（水）

会　　場：グランドホテル神奈中平塚

司　　会：平塚市民病院皮膚科　木花いづみ先生

製品紹介：「抗ヒスタミン薬の最新トピックスについて」

総　　会：

特別講演：「どう扱う？　高齢者の皮膚癌」

講　　師：平塚市民病院皮膚科医長　藤尾由美先生

・要旨

高齢化社会になり、皮膚癌罹患率・死亡率が増加している。皮膚癌は大きく６つのタイプに分類される。

１．メラノーマ ２．基底細胞癌 ３．ボーエン病 ４．乳房外パジェット病 ５．有棘細胞癌 ６．付属器癌である。中でも基底細胞癌、有棘細胞癌は75歳以上で増加傾向である。

高齢者皮膚癌患者の特徴としては癌が増大してからの受診が目立つことが挙げられる。基本方針として根治術が可能な症例は手術を行うが、高齢者患者は認知症、多くの合併症、入院によるADL低下やせん妄などの問題点がある。そのため、手術療法において病変部の再建をしないことや、場合により陰圧吸引療法を用いるなどの工夫を行っている。また、手術の回避が好ましい症例については癌の組織腐食や殺菌・消臭目的にモーズペースト（主成分：塩化亜鉛）を用いる、イミキモドを外用し癌を縮小させる方針を選択することがある。

講 演 １：「治子コレクション－Ⅳ 小児の皮膚病シリーズ①」

講　　師：関東中央病院特別顧問　日野治子先生

講 演 ２：「静脈瘤の最新治療」

講　　師：湘南平塚静脈クリニック院長　秋好沢林先生

情報交換会：

共　　催：平塚市医師会皮膚科部会、大鵬薬品工業株式会社

【第75回例会】

出 席 者：32名

日　　時：平成29年９月27日（水）

会　　場：グランドホテル神奈中平塚

司　　会：かものはし皮膚科　木花　光先生

製品紹介：「爪白癬治療薬 クレナフィン爪外用薬」

総　　会：

特別講演：「意外な食物アレルギー」

講　　師：済生会横浜市南部病院皮膚科主任部長　松倉節子先生

・要旨

意外な食物アレルギーを①経皮感作 ②花粉症 ③食物アレルギーの３点から述べた。

①経口的に摂取した食物抗原に対しては免疫寛容が誘導され（経口免疫寛容）、経皮的に暴露した食物抗原に対しては感作が誘導される（経皮感作）。代表例として、ピーナッツアレルギー、茶のしずく石鹸に含有される加水分解小麦による小麦アレルギーなどが挙げられる。経皮感作に関連するものとして、チコリーによる接触蕁麻疹、コチニール（カルミン）によるアナフィラキシーがある。

②口腔アレルギー症候群のうち、花粉アレルゲンに対する特異的IgE抗体が果物や野菜アレルゲンにも反応するものを花粉・食物アレルギー症候群という。実際の症例としては、ハンノキ花粉症に伴う大豆アレルギー、ヨモギ・ハンノキ花粉症に伴うスパイスアレルギーが挙げられる。診断は採血検査でのアレルギーコンポーネントの陽性やプリックテストである。

③食物アレルギーに対する抗原特異的免疫療法として、経口免疫療法、舌下免疫療法、経皮免疫療法、皮下免疫療法が近年盛んに検討されている。

ミニレクチャー：「治子コレクションⅤ 小児の皮膚病シリーズ③」

講　　師：関東中央病院特別顧問　日野治子先生

情報交換会：

共　　催：平塚市医師会皮膚科部会、科研製薬株式会社

【第76回例会】

出 席 者：37名

日　　時：平成30年１月24日（水）

会　　場：ホテルサンライフガーデン平塚

司　　会：平塚共済病院　竹林英理子

製品紹介：「アレルギー疾患治療剤 ビラノア錠20mg」

特別講演：

講　　師：神戸大学大学院医学研究科内科系講座皮膚科学教室講師　福永　淳先生

テ ー マ：「新時代の蕁麻疹診療 ―手を焼く蕁麻疹の治療」

・要旨

今回のテーマを①蕁麻疹・アナフィラキシー総論 ②蕁麻疹のガイドライン改訂版の要点 ③ガイドラインからみた蕁麻疹の病型分類と具体例の３点から述べた。

①蕁麻疹の病型診断では、皮疹を誘発できるか、自発的に皮疹が現れるかで治療の内容と目標を明らかにし、原因・悪化因子の除去・回避や抗ヒスタミン薬などの薬物療法を組み合わせる。アナフィラキシーとはアレルゲン等の侵入により複数臓器にアレルギー症状が惹起され生命に危機を与え得る過敏反応を指す。アナフィラキシーはハチ毒・食物などによるIgEを介した反応と薬剤（NSAIDs）などによるIgEを介さない反応に分けられる。

②蕁麻疹ガイドライン改訂においては難治性蕁麻疹におけるステロイド投与期間と使用量の限定やオマリズマブの適応が導入される。

③蕁麻疹は16病型に分類され、特発性の蕁麻疹は全体の70%である。

原因を特定するための検査としてはプリックテストや自己免疫血清テストなどがある。減汗性コリン性蕁麻疹は治療法が大きく異なるために鑑別診断が重要である。

講 演 Ⅰ：「診断に苦慮した蕁麻疹様血管炎」

講　　師：平塚市民病院皮膚科　鈴木千尋先生

講 演 Ⅱ：「治子コレクションⅥ 皮膚病の色」

講　　師：関東中央病院特別顧問　日野治子先生

情報交換会：

共　　催：平塚市医師会皮膚科部会、大鵬薬品工業株式会社

（文責：竹林英理子）

○　○　○　○　○

地域医会だより

厚木市皮膚科医会

【例会】

例年通りに前期、後期の２回開催いたしました。

１．第42回例会

日　　時：平成29年６月29日（木）19時～

会　　場：レンブラントホテル厚木

特別講演：「ヘルペス感染症の病態と治療の最前線」

講　　師：山梨大学医学部皮膚科講座教授　川村龍吉先生

２．第43回例会

日　　時：平成29年11月30日（木）19時～

会　　場：レンブラントホテル厚木

特別講演：「実臨床におけるクレナフィンの実力」

講　　師：NTT東日本関東病院皮膚科部長　五十嵐敦之先生

【厚木愛甲地区専門校医（相談医）事業】

皮膚科、産婦人科、整形外科、精神科の専門４科、学校医と生徒父母代表、校長、養護教諭の代表が集まり、最近の情勢を考慮し種々の活動を行っています。

ただ開始から年月も経過し、徐々に先細りの傾向が有り、全科ともFAX、メール相談や講演活動が減少気味です。

28年度にも書きましたが、啓蒙活動の一つとして表題「紫外線のはなし」というリーフレットを作成。生徒、家族向けに配布いたしました。

（文責：小幡秀一）

○　○　○　○　○

地域医会だより

丹沢皮膚の会

昭和63年に発足し、平成19年より活動を休止しておりました丹沢皮膚の会が、この度10年ぶりに開催されました。

【第40回丹沢皮膚の会】

日　時：平成29年11月２日（木）
場　所：伊勢原シティプラザ
テーマ：「帯状疱疹の治療、予防 ～妊婦は？　小児は？　その疑問にお答えします～」
講　師：東海大学専門診療学系皮膚科学教授　馬渕智生先生
座　長：かとうひふ科医院　加藤正幸

【神奈川県皮膚科医会第156回例会・第41回丹沢皮膚の会】

日　時：平成30年３月４日（日）
会　場：関内新井ホール
テーマ：「足・爪のトラブルを考えよう」
開　会：
医会報告：
健保コーナー　Q＆A
ミニレクチャー
テーマ：「爪白癬の診断と治療」
講　師：帝京大学医学部附属溝口病院皮膚科助手 下山陽也先生
座　長：東海大学専門診療学系皮膚科学助教　近藤章生先生
イントロダクション：かとうひふ科医院　加藤正幸
講演１：「日常診療における足のトラブルの考え方（陥入爪、胼胝など）」
講　師：足のクリニック表参道　桑原　靖先生
座　長：かとうひふ科医院　加藤正幸
講演２：「爪部腫瘍及び薬剤性障害」
講　師：静岡県立がんセンター皮膚科医長　吉川周佐先生
座　長：東海大学専門診療学系皮膚科学講師　田宮紫穂先生
講演３：「乾癬の爪症状と関節症状」
講　師：東海大学専門診療学系皮膚科学教授　馬渕智生先生
座　長：秦野尾尻皮膚科　生駒憲広先生

（文責：加藤正幸）

○ ○ ○ ○ ○

地域医会だより

相模原市医師会皮膚泌尿器科医会

【平成29年度の活動】

・講演

日　時：平成29年４月13日（木）
会　場：ホテルラポール千寿閣
テーマ：「今さら聞けない皮膚真菌症の事」
講　師：済生会横浜市東部病院皮膚科部長　畑　康樹先生

日　時：平成29年６月８日（木）
会　場：ホテルセンチュリー相模大野
テーマ：「ヘルペス感染症の病態と治療の最前線」
講　師：山梨大学医学部皮膚科学講座教授　川村龍吉先生

日　時：平成29年９月７日（木）
会　場：ホテルセンチュリー相模大野
テーマ：「男性不妊診療の現状について」
講　師：横浜市立大学附属市民総合医療センター生殖医療センター部長　湯村　寧先生

日　時：平成29年11月９日（木）
会　場：ベストウェスタンレンブラントホテル東京町田
テーマ：「新規内服治療薬による乾癬治療のあけぼの」
講　師：関東労災病院皮膚科部長　足立　真先生

日　時：平成29年12月３日（日）　神奈川県皮膚科医会第155回例会と合同
会　場：関内新井ホール
ミニレクチャー：「外用療法から生物学的製剤まで -乾癬治療におけるポイントと連携」
講　師：聖母病院皮膚科部長　小林里実先生
講演１：「外用剤の混合は基剤を『水』と『油』に分けて」
講　師：杏雲堂病院診療技術部部長　大谷道輝先生
講演２：「それでもやっぱり塗り薬 ～外用療法は理論か？　それとも経験か？」
講　師：札幌皮膚科クリニック副院長　安部正敏先生

日　時：平成30年２月８日（木）
会　場：ホテルセンチュリー相模大野
テーマ：「小児アトピー性皮膚炎の治療と鑑別すべき皮膚疾患」
講　師：東邦大学医療センター大橋病院皮膚科客員教授　向井秀樹先生

・その他

北里大学皮膚科学教室のご厚意にて７月に北里皮膚疾患フォーラム、11月に相模原皮膚科学セミナー、平成30年３月に北里臨床皮膚フォーラムに参加させて頂きました。

（文責：大木　和）